
剣を舞う適格者

RAGUNAROKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣を舞う適格者

【Nコード】

N4067D

【作者名】

RAGUNAROKU

【あらすじ】

仮面ライダー剣とのクロスです。仮面ライダーCは、仮面ライダー剣の力を30%低くして新たに開発されたものです。剣崎達の年齢は、劇場版を元にしていきます。

第巻話 仮面ライダー 剣C

「僕に勝てるかな？」

キング（カテゴリーク）が、目の前の仮面ライダー（剣C）に言う。
「…それは、やって見なきゃわからないことだよ……ハアアアアアアアア！」

醒剣ブレイラウザーをラウザーホルスターから抜き、目の前のキングに切りかかる。

だが、キングもただでやられるわけではない、切り下ろされたブレイラウザーを横に避け、オールオーバーを仮面ライダーに斬りつける。

オールオーバーを仮面ライダーは体を捻りながらブレイラウザーを横に振りぬく。

オールオーバーとブレイラウザーが弾かれ、一瞬仰け反るが、仮面ライダーは遠心力に逆らわずにそのまま反対側から斬りつける、キングはソリッドシールドで防ごうとするが、少し遅かったために斬りつけられる。

「ぐあああああ……！」

「まだまだあああああ……！」

仮面ライダーは何度も何度も追撃をする。

その為後ろに思いつきり吹っ飛ばすキング。

「はあ……はあ……はあ」

「これで決める」

左腕に装備されているラウズアブソーバーにスピードQのトランプをセットする。

<アブソーブクイーン>

そして、スピードJのトランプをラウズする。

<フュージョンジャック>

すると、仮面ライダーはジャックフォームへと強化した。

醒剣ブレイラウザー（強化型）に収納されているオープントレイを円状に展開してスピードの6と2を引き抜き、ブレイラウザーにラウズする。

<サンダー……スラッシュ……ライトニングスラッシュ>

「はあああああ」

仮面ライダーは背中のオリハルコンウイングを展開し急上昇した後、雷を纏ったブレイラウザーを急降下しながら振りぬいて放つ。放ったライトニングスラッシュがキングに決まる。

『グアアアアアアア！！！』

その後、炎に包まれる。

仮面ライダーは、降り立った後、封印カードを手にし、キングに投げられる。

縦回転しながらキングに刺さったカードは、キングを吸収し封印した後、仮面ライダーの手に戻る。

仮面ライダーは、ターンアップハンドルを引いて変身を解く。

誰もいないビル街に残っているのは、コンクリの破片と彼だけだった。

「おい！シンジ！！」

後ろのほうから自分の呼ぶ声が聞こえ、シンジと呼ばれた黒服の少年は後ろを向く。

そこには、四人のライダーがいた。

「剣崎さん、橘さん、相川さん、上城さん」

彼が言った後、彼らは変身を解く。

「まさか、カテゴリークまでも封印するなんて、信じられないな」

「これも一種の才能と言うやつだろう」

「だが、始めてから三年足らずでここまでやるとは、いくらブレイドのコピーとは言え、ここまでやるとは大した物だ」

「そうですね、これじゃ、いつか僕らも抜かされちゃうんじゃないんですかね」

「そんな、僕はそこまで強くなんて有りませんよ、この力があるの

は皆さんのおかげですよ。僕は変身して戦っただけですから」
剣崎は、うりゃ、と両手で、シンジの長い黒髪をクシャクシャと揉みくちやに撫でた。

「そう謙遜するな、お前は俺達ですら苦戦したカテゴリークを封印することが出来たんだ。それだけは、胸を張って良いんだぞ」

橘は微笑みながらシンジの頭を撫でる。

シンジも頭を撫でられながら、微笑む。

「これで、お前も一人前のライダーだな」

「そうですね」

腕を組んでいた相川がそう言うと、それに同意する上城。

「そだ、今日はパーティーやらないか？シンジのライダー一人前を祝して」

「それは良い考えだな」

「だったら、全員を呼んでこようか」

「今夜は楽しくなりますね」

「…後片付けも大変ですけど」（苦笑）

シンジがそう呟いた後、彼らは多いに笑った。

その所は主夫であるシンジであった。

それから一ヶ月後。シンジは剣崎、橘、相川、上城と共にブルースペイダーに乗って第三新東京に居た。

「いやー、結構凄いなあ」

「まったくだ、彼らも命をかけて、怪獣映画を作っているからな」

ズズン…

ズズン…

ズズン…

「巨人が現れましたよ」

「だが、『あれ』より小さいがな」

「相川さん、『あれ』と比べないほうが良いと思いますよ」

ところで、と剣崎達に振り返って言う。

「広瀬さん達に連絡しますか？」

剣崎達は少し考えて。

「ほつといて良いと思うよ」

「あんなものは、アンデットとは違うと思うが」

「同意見だ」

「剣崎さんと同じ」

と言った。

シンジは、取り出した携帯をポケットにしまって。

かわりにプレイバツクルCを取り出して。

「変身」

<ターンアップ>

仮面ライダー剣Cブレイドに変身する。

「よし、逝って来い」

「……あの、行って来いが逝って来いに聞こえたのは気のせいですか？」

橋の言葉に顔を向け後頭部にデフォルメされた汗がタラリと落ちる。

「気のせいだ」

「…そうですね」

それだけ言って、シンジは巨人に向かって行った。
勿論、自分の足で。

近くまで来たシンジは、少し首をかしげる。

「本当に何なんだ？アンデットじゃあるまいし。まあ良いか、一気に倒そうかな」

ブレイラウザーに収納されているラウズカードを円状に展開して、
三つのカードを引き抜く。

そして、スラッシュリーダーにラウズする。

<キック：サンダー：マツハ：ライトニングソニック>

「ハアアアア！！」

シンジは高速を超え超高速に達したところで、天高くジャンプをし
電撃を纏ったキックを放つ。

アンデットならこのキックで終わりなのだが、巨人・『使徒』は違

う。

キイイイン！！！

「なっ！！！！」

パリーイイイン！！！

ドガッ！！

ズザアアア！！

「一撃で倒せない！？なら今度は！！！」

もう一度、カードを円状にして、二枚のカードを引き抜きラウズする。

<スラツシユ…サンダー…ライトニングスラツシユ>

ブレイラウザーに電気が帯びてシンジは天高く飛び、ブレイラウザーを振り下ろす。

「でりやああああ！！！！！」

斬！！

頭部から股間まで真っ二つにし、そこを離れる。

そして、爆発。

チュドーーーーーン！！！！

巨人は塵も残さず消えた。

「あ…まじでなんだったんだ？あれは。さて、剣崎さん達と一緒にいきますか」

そういつて、剣崎達のところへ戻って行ったが、

「……………」

《後はがんばれよ by 剣崎》

と言う、置手紙がシンジの乗るブルースペイダーの椅子部分に載っていた。

「………… 剣崎さん達のバカ」(涙)

ガクッと膝をついて頂垂れる。

しばらくして復活し、第3新東京へと向かった。

第貳話 到着、第3新東京市

シンジは第3新東京市に到着した後、すぐホテルに泊まりフロントにある電話を借りて剣崎達に連絡をする。

プルルルル、プルルルル！

『はい、剣崎です』

「剣崎さん？シンジです」

『ああ、シンジ。着いたんだ。第3に』

「ええ、それで？あいつは何だったんですか？」

『調べて見たところ【使徒】って言うことが分かったよ。数は全部で17体』

調べて見たと言う言葉に一瞬口を紡ぎ、言った。

「……ハッキングでもしたんですか？（小声）」

『……広瀬さんがね』

「……あの人には絶対に逆らいたくないですよ」

『まあね、それから、厳しくなると思うから頑張っ。それと、4』

枚のキングのカードを送るから』

「はっ！？えっ！？援軍しに来てくれないんですか！？」

『こつちにも色々都合があるからね、カードは郵送で送るから。』

じゃー！』

「えっ！？ちよ、ちよっと！？」

ガチャ、ツー、ツー、ツー。

「……切られた。最悪」

ガチャ

シンジはフロントの人に御礼を言い、部屋へと戻った。

明日、碇老から渡された家へと向かうことになっていた。

「はあ……これから先、どうなるんだろう」

仰向けに天井を見ながらそう呟くシンジ。

翌日、第3新東京市の郊外にある一軒家

「へえ、ジイちゃんも結構良い、家を用意したね。しかも、和風の家だし」

そこは、庭園も備えられており、家の中の風呂場は温泉式になっていた。

キッチンのほうは洋風であり、寝室や客間は畳で敷き詰められていた。

家の裏のほうには、オリジナルフェラーリ・FX X、2005年代のものが有った。

ちなみにシンジはスーパーライセンスを所持しているためF-1も運転できる。

（まあ、公道でF-1を操縦するバカは居ないと思うが、一匹の牛を除いて）

「宅配便です」

「はい」

黒いロングコートの内側のポケットから印鑑と朱肉（だったかな？）

を取り出して、判子を押す。

宅配便の人は、封筒を手渡して去って行った。

「剣崎さん達からだ、やっぱり、援軍には来てくれないんだね」

4枚のKカードをラウズホルダーに仕舞って、家の中へと入っていた。

今日一日、全て家で過ごした。

日々の鍛錬を忘れずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067d/>

剣を舞う適格者

2010年10月10日14時48分発行